

さんしゃ Zapping

Vol. 31 No. 4 (通巻 184 号)

2017 年 3 月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

<ご退職挨拶>

- | | | |
|----------------------------------------|-------|------|
| 二つの 36 年と産業社会学部・立命館 | 石倉 康次 | p. 2 |
| 退職を迎えるにあたって——わたしと産社、立命館—— | 小川 栄二 | p. 4 |
| 池塘春草の夢 | 唐鎌 直義 | p. 6 |
| 退職を迎えるにあたり研究と教育を振り返る
—国際教育の展開に関わって— | 坂本 利子 | p. 8 |

<ご退職挨拶>

二つの 36 年と産業社会学部・立命館

石倉 康次

私は、2005年に本学部に着任して教員として12年間過ごしました。実は私自身は46年前の1970年4月に本学部の学生として入学し、1981年3月に大学院社会学研究科博士課程を満期退学するまで11年間学生・院生として在学をしていました。

私は1952年生まれですから、第二次世界大戦を経験をしていないこともあって、敗戦は遠い私の親の世代の体験のように思っていました。今思えば、戦争が終わった1945年から私が大学院を退学した1981年までは、36年の年月が経っていたのです。ところが、その大学院卒業から今日までの期間が、ちょうどそれと同じ36年を過ぎたことになるのです。

前半の36年間は敗戦から日本の民主化を経て、高度経済成長とインフレの高進、公害・ベトナム戦争への日本からの米軍機の出撃、沖縄の本土復帰、学園紛争、革新自治体運動の高揚と「福祉元年」宣言、そしてオイルショックを転換点とした経済成長の減速

へと上り詰めていった時期でした。後半の36年間は、福祉見直し、臨調行革による自治体リストラと福祉をふくむ公的部門の縮減と民営化・市場化、90年代のバブル崩壊から構造的不況、そして経済のグローバル化（実は多国籍企業中心の国家規制の緩和）と格差貧困の拡大のもとでの福祉抑制政策、そして2016年にはその流れの転換ともいえる、イギリスのEU離脱・トランプアメリカ大統領の誕生というようなグローバル化への反動の流れが表面化してきて、二番目の36年が終わろうとしています。

立命館大学産業社会学部が設置されたのは、前半の時期の半ばであり、民主化の高揚と噴出する社会問題から住民のいのちと暮らしを守ることを求めた革新自治体運動が力を得てくる時期でした。私が、大学進学先を相談に行った中学生時代の先生から「産業社会学部」という面白い学部をできたそうだから受けてみてはどうかと助言されました。そんな時期に、活発な研究活

動や社会活動をする先生方が、産社だけではなく他学部にも多数在籍しておられたことがその背景にはありました。私たちの学生生活は、学園紛争の影響で講義に出席する習慣はあまり強くはなく、いろんな学内外のサークル活動等に参加して社会と人間を考え議論し、映画を観たり新刊本や古本を漁って自学することを多くの学友達が普通にやっていたのです。生活のためにアルバイトで忙殺されることもありませんでした。

研究者としての歩みを開始した 1980 年代は、日本社会の在り方が、今でいう新自由主義路線に転換をはじめた後半の 36 年間のはじめの時期でした。立命館大学も、そのような時流の変化に適応すべく、かつての「左翼大学」「民主立命」という、少し誇張された社会的なレッテルを払しょくし、新しい時流に乗った巨大私学として生き残る道を模索しはじめたのだと思います。その結果「学費が安く、庶民の子弟や勤労学生」が進学しやすい私学という実像は徐々に崩れて行き、学生層に変化が起こってゆきました。私が赴任した 2005 年には、産社の規模は私の学生時代の 3 倍になり、学生の服装もかつての地味なものから、きらびやかなものになっていました。社会科学系のサークル活動はほとんど消滅し、スポーツ系の課外活動が盛んにな

り、しかも全国的な競技のトップ争いに立命の看板を背負って食い込むことを目標とする雰囲気濃厚にただよう活動に変貌していました。私が学生時代にクラスぐるみで野球の同立戦に行った時のような牧歌的なものはそこにはみいだせません。そして、今日では「グローバル人材の養成」という目標を掲げて、つつ走っているように見えます。走っているのは学生自身の意志なのか、大学の評価を高める駒として走らされているのか、おそらくその融合のように見えます。

後半の 36 年間の終わる 2017 年は、世界を席卷したグローバル化の動きへの反省がひろがる画期となるでしょう。もちろん、国境をとざしたり、壁を高くしたり、他者を排除する方向が新しい解になるようにも思えません。多様性を認めあい、お互いの利害や主権を前提とした、関係の再構築と貧困と格差を修復する新しい、国内的・国際的なルール of 民主的再構築にむかう道の探究が切実に求められる時代が来ているのだと思います。産業社会学部はそのような時代にどのようなポジションをとるのが、客観的には問われてくるでしょう。大学という組織体は経営体ではあっても運動体ではないので、時代の流れを先駆的に切り開いていく力を持ち合わせているのか疑問です。むしろ、時流に乗りながら受験生

の親世代の意向も見極めつつ後追いで、適応の道をさまよってきたというのが、80年代以降の現実のように思います。組織存続の論理が優位を占めてきたように見えます。しかし、能動的な主体は、大学組織ではなく、その構成員である学生や教職員であるはずで、同時にどのような学生層に門戸を開き、どう育てていくのか方向性を意識的に選択し決めていくのは、いま在職する教職員なのだと思います。産業社会学部は組織規模が大きいですが、なかなか合意形成が容易ではありません。意識的にどちらかの方向にもっていこうと考えること自体不遜だと思われる方もおられるかも知れませ

ん。しかし、2016年度あたりから、若い先生方が、FDなどで活発に学部の現状や課題を集团的に共有しようという作業を始めておられることに、私は大いに希望を持っています。私よりも、若い世代の教職員の皆さんが、どのように学部の舵取りをされていくのか、静かに見つめてゆきたいと思っています。

私自身は立命館という組織の存在と、その構成員のみなさんに大変お世話になったこともまた事実です。そんなことを思いつつ拙い文を閉じます。最後までお読みいただいた方は、駄文におつきあいいただき感謝いたします。

退職を迎えるにあたって ——わたしと産社、立命館——

小川 栄二

○赴任した年。

私が立命館大学産業社会学部に赴任したのは、2001年4月でした。民間会社2年、世田谷区の福祉事務所にケースワーカーとして23年勤務した後の、50歳になる年の転勤でした。もともと、東京目黒区で生まれ赴任す

るまで目黒区に住み続け、幼稚園から大学までも目黒区内、勤務先は隣接の世田谷区でしたから、広い東京のごく一部で50年間過ごしたあとの、遠距離転勤でした。

さて、立命館大学に採用していただいたのは、丁度2001年に人間福祉学

科が設立されることになり、社会福祉実践系の教員の募集があったからです。当時 210 名の人間福祉学科は、希望者は全員、社会福祉士課程に登録できる仕組みで、かつ当時は福祉職を希望する学生が多くいましたので、200 名体制実習クラスは 8 クラスくらいあったのではなかったか、と記憶しています。

当時、「地域クラス」という、自治体と協定を結び、自治体の福祉資源を「まるごと」実習先にしていただける、というクラスがありました。協定先は舞鶴市と福井県上中町（現在は合併して若狭町）です。両自治体の担当職員の皆様、現地での福祉施設の皆様には、言い表せないほどお世話になりました。学生は当然泊まり込みとなり、確保していただいた宿泊先で自炊で 2 週間を送るのです。当然いろいろな出来事がありました。担当教員と実習室の主事は、事前の打ち合わせ、実習巡回、事後対応のため、一夏に何度となく現地に赴いたのでした。学生は貴重な学びと生活体験をしてきたのは言うまでもないことです。

○思い出すいくつかの出来事

大学と産業社会学部・人間福祉領域は、様々な局面を経てきましたが、二つことを思い返します。一つは、人間福祉領域と社会福祉士課程のありかたをめぐるものです。発足後 4 年後の見

直し、07 年改革、「人間系新学部」の設立と人間福祉専攻の帰属先が問題となりました。また国の社会福祉士課程カリキュラム改定に伴う対応、具体的には課程を「返上」するか否か、という大きな問題でした。結果は現在の状態が示すところですが、今後も様々な課題が出てくるだろうと思います。

もう一つは労働条件と大学のガバナンスを巡る一連の出来事でした。私は、現象的には 2005 年の一時金削減問題という形で課題が表面化したと理解しています。“幸い”にもこの年、私は産業社会学部選出の組合執行委員になってしまいました。もちろん委員長や書記長のような重責をになってはいないものの、大変な出来事でした。団交の後、かつてないストライキ（昼を挟んだ 1 時間時限スト）を行うに至ったのです。団交の席では、ふだん気の小さい私も、覚悟して「強い」発言をしました。

○学生・院生から学んだことお世話になった先生がた、職員の皆様

初めての教員生活でしたから、たしかに初めは大変でした。初めの数年間は殆ど授業準備に追われていました。思い返して不十分さを否めません。しかし、当時学生は自分から学んでくれたし、私に率直に意見をぶつけてくれました。学生・院生の問題提起で私が学んだことは数多くあります。ほんと

うに感謝しています。学生・院生の研究課題が私の研究課題となり、現在も取り組んでいるテーマもあります。

先生方からは、非常に多くのことを教えていただきました。赴任したばかりの私に、「小川さん。大切なのは事実だよ」を言ってくれた先輩の先生。私より若いけれど、研究・教育では先輩の先生方から、「イロハ」にあたることも含めて教えていただきました。学生・院生・先生・職員の皆様方には心

から感謝申し上げます。

人間福祉学科 2001 年採用の教員は 10 数名いたと思います。その中で、おそらく私が初めての定年退職者ではないかと思います。つまり年だけはとっていたのですね。

やりきれなかった研究課題のごく一部をなんとかまとめた、と思うこのごろです。

ありがとうございました。

池塘春草の夢

唐鎌 直義

修士論文を提出してから 41 年が過ぎた。立命館大学での 5 年間は文字通りアツと言う間の事であったが、何よりも自分の研究生活が 41 年も経過したことに驚きを禁じ得ない。朱子の「未だ覚めず池塘春草の夢」とは、今の私の感慨に他ならない。

研究という仕事は本質的に非常に孤独なものである。ほとんどの研究者は格別の賞賛を受けることもなく、その一生を終える。ただ、なにがしかの思想や理論を継承し、そこにわずかな発展を付け加えて、次の世代にバトンタッチしていくに過ぎない。本来それで

良しとしなければならぬのだが、孤独に耐えきれなくなった人は、賞賛を求めて初心を忘れたり取り巻きを形成したりして、孤独を一刻忘れようとする。その気持ちは十分に理解できるのだが、所詮儂い行為ではなかろうか。貧困研究は「際物」扱いされることが多い。そう割り切って孤独な世界に浸ってきた自分だが、定年退職の歳を迎えて、いくつかのささやかな（本当にささやかな）慶事が続いた。

夏休みも終わろうとする頃に、アメリカのマンスフィールド財団の研究者が日本の高齢者の貧困について知れた

いと言って、わざわざ残暑の衣笠を訪日した。「カラカマの研究をニューヨーク・タイムズで読んだので」ということであった。その少し前にウォールストリート・ジャーナルから取材を受けたことはあったが、本人の知らないうちに、いつの間にニューヨーク・タイムズに掲載されたのであろうか。小川先生と二人で対応しながら、キツネにつままれたような気分になった。

秋になると、見知らぬ出版社から、印税を支払うので口座番号を教えて欲しいという手紙が届いた。同封の印刷物を見ると、2012年刊の自著に書いた文章が4ページにわたって某国立大学の入学試験の出題文に使われていた。その出題文が過去問集として出版されるので、承諾してほしいという内容であった。「一体誰が選んだの。私でいいの？ 偏向してない？」と驚くよりも呆れた（これでも一応の自覚はあるのです）。

冬になると、イギリスのケン・ローチ監督の映画「私はダニエル・ブレイク」(2016年カンヌ、パルムドール受賞作品、3月18日封切り)の試写会の招待葉書が届いた。珍しい事なので「マイケル・ムーア監督の『シッコ』以来だな」などと思っていたら、後を追うようにその配給会社から「ケン・ローチ監督のドキュメンタリー映画『1945年の魂』(2013年)の日本語版

DVDを出すので、そこに唐鎌先生のインタビューを収録したい」というオファーが来た。配給会社の人は私の著書やYou Tubeで配信されている国公労連によるインタビュー(全部で3時間余)などを丹念に検討したらしい。「このイギリス福祉国家の成立過程を追ったドキュメンタリーにぴったりの研究者は、日本中探しても唐鎌先生しかいない」と口説かれた。「藤田孝典さんも稲葉剛さんも、言っていることは唐鎌先生がずっと以前から主張してきたことの域を出ていない」とも言われた。そうまで言われれば、引き受けなくてはいけないという気分させられた

(収録済み。5月に発売されるので、関心の向きは是非ご購入下さい)。江口英一先生が切り拓かれた日本の貧困研究は、そのエッセンスが私を経由して2人の若い研究者(実践家でもある)に確実に受け継がれている気がする。また、専修大学時代の私の社会保障論の授業を、水曜1限にも拘わらず、毎週最前列の席で聴講してくれた戸室健作君(当時明治大学大学院博士課程院生、遠藤ゼミ、現山形大学准教授)にも、貧困研究の種を播いたのは江口先生だが、出た芽を挿し木で殖やすことくらいは私もしたようである。

そして2月。教学委員会が終わった後、永橋先生からビックリするようなお話を聞いた。永橋先生によると、長

崎県大村市で先進的な地域活動に取り組んでいるお寺の住職さん（尼僧）がいらして、その尼さんを調査研究で訪ねたところ、パワーポイントで説明が始まったら、いきなり私の名前が出てきて驚かれたとのこと。その尼さんは大正大学時代の社会保障論の受講生であり、私のイギリス社会保障に関する講義に感化されて卒業後イギリスに渡り、その見聞を今の地域活動に生かしているとのことであった。「先生が20年以上前に播かれた種が、こうして今の活動に繋がっていることをお知らせしたくて、お呼び止めしました」と永橋先生はおっしゃった。

その日の夕刻。大学の南門を出て帰途についた私は、永橋先生のお話を思

い出し、あの緩やかな下り坂が一面の桜吹雪で埋まっているような感覚を持った。まさに「学者の花道」である。

「私の定年退職を天が祝福してくれているのだろうか」と思った。

臆面もなく秋口からの出来事を告白したが、どの研究者にもこうしたささやかな慶事は必ずあるはずである。いましばらくは立命館大学に在籍して3人の博士課程院生を一人前にし、職責を全うしたい。その後はバラ作りの世界へと自己を解放してやりたい。すでに大量のバラ苗が家に届き、定植されるのを待っている。そう、一番好きな純白のバラ「ヴィルゴ」から植えることにしよう。そうすれば、いつでも12歳の夢に戻れる気がする。

退職を迎えるにあたり研究と教育を振り返る

—国際教育の展開に関わって—

坂本 利子

2003年度に産業社会学部に着任以来、私の研究と教育は2足の草鞋で歩んできたと思う。ひとつは、もともとの研究領域であるアフリカ研究やポストコロニアル文化研究であり、もうひとつは多文化間共修教育である。本稿

では、退職を迎えるにあたり、後者の多文化間共修教育に関わって、学部と全学の国際教育の展開を振り返る。

着任当時は、2000年に衣笠キャンパス5学部を横断する国際化教学プログラム「国際インスティテュート」が定

員 210 名、「国際法務」「国際公務」「国際社会」の 3 つのプログラムでスタートして 3 年が経過した時期で、学生は学部によって所属するプログラムが割振られ、産業社会学部と文学部は「国際社会」にそれぞれ 35 名の定員、法学部は「国際法務」に 35 名、国際関係学部、政策科学部、法学部は「国際公務」に 35 名ずつの定員が割振られていた。その後国際インスへの入試出願状況が定員の 10 倍から 15 倍という状況を背景に、2004 年には定員を 410 名へと倍増し、各学部の定員も倍増された。さらに産業社会学部では、2005 年度に当時の人間福祉学科を対象に国際インス「国際福祉プログラム」(定員 70 名)が新設され、定員が 2000 年当初の 35 名から 105 名へと 3 倍増となった。

学部カリキュラム改革では 2001 年度に導入された 2 学科制(産業社会学科と人間福祉学科)に代わって、2007 年度の改革で現行の 1 学科(現代社会学科) 5 専攻制となり、英語カリキュラム改革では私は 2006 年度英語コーディネーターとして関わり、必修外国語の英語専修コースを廃止し、英語重視と初修重視の 2 コースに整理した。そして、それまでの全学英語副専攻に代わって学部英語副専攻プログラムを立ち上げ、学部で英語の運用能力をさらに向上させたい学生たちのために、

スキルベースで Academic English の能力を伸ばす A 群科目、コンテンツベースで学部の専門に関連する内容を英語で学ぶ B 群科目、そしてオーストラリアでの海外研修(Study Abroad Program: SAP) C 群科目を開設し、英語スピーチコンテスト、国際教育科目、異文化間教育科目を導入して 07 改革が完成した。こうして学部の国際教学は、これまでの学部独自の海外研修、国際教育科目に加えて、全学の国際インスティテュートと学部英語副専攻、全学初修副専攻を柱に展開していくこととなった。

学部横断型の国際インスプログラムには、本学部からも多くの科目を提供し、様々な成果を上げた一方で、増加する定員を支える教学体制が必ずしも磐石とはいえなかったことやその他の課題にも直面し、2011 年度の募集を最後に停止することとなった。2012 年度以降は本学の国際教育は新たなフェーズを迎え、全学と学部で多様に展開されている。学部はそれぞれの教学に沿った国際教育を独自に展開し、産業社会学部では次期カリキュラム改革までの過渡的措置として、学部の教学にフォーカスした国際的学びの履修モデル「グローバルフォーカス」が 2012 年度に立ち上がり、英語副専攻と専門科目、国際セミナーなどの小集団科目、各種海外研修プログラムを組み合わせ

た履修モデルを提供し、今年度5年目を迎える。グローバルフォーカスの立ち上げには2010年度国際担当副学部長としてかかわらせていただいたが、当時の国際化推進委員会の教職員と学部全体で熱心な議論を重ね、新たな海外研修科目の開講やさまざまな実務を果敢に遂行していただいたお蔭で実現した。現在は2019年度の学部カリキュラム改革に向けた議論が進められており、新たな産社国際教学の誕生を楽しみにしているところである。

2003年度着任以来のさまざまなカリキュラム改革の波は、私の教育だけでなく研究にとっても大変おおきな経験であった。産業社会学部へ着任する前の3年間APUで教鞭をとった経験も、その後の私の教育と研究に決定的な影響をもたらした。外国語教育やその他の教育において、学生はテキストと教師によってというよりは、多様なピアの中で育つことを経験した。APUは開学以来17年が経過した今日では、初年次にAPUでの学修の基礎を学ぶ多文化間共修科目を全員が受講

し、学部生がTA研修で徹底的に育成され協働学習をリードしている。私が勤めていた開学からの3年間はそうしたシステムは整備されておらず、個別に国内学生と国際学生の学び合いの場を構築していた。その時のネットワークと経験が、本学部着任直後に多文化間共修教育にかかわっていく際の基礎となっている。

現在開講している短期留学生との共修や、APU国際学生との遠隔交流科目、台湾の大学生との遠隔交流と「アジア学生国際交流プログラム」への参加などは、キャンパスでも国際的学び合いの場、多文化間共修を実現するための教育であり、海外経験のない国内学生が何を学んでいるかを研究してきた。多文化間共修教育の理論的背景や実践実例、教育効果については、文末の図書、論文を参照されたい。

このようなテキストやマニュアルのない国際教育の実践は、職員の皆様のご支援なくしては実現、継続しなかった。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

多文化間共修教育の理論的背景や実践、教育効果などについては、下記の著書や論文のほか、学会・フォーラム・研究会等で報告した。

- ・坂本、堀江、米澤（2017）『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』（学文社）
- ・坂本（2013）「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか—多文化

共 生力育成をめざして一』『立命館言語文化研究』

・坂本、吉田、本田、片山、和田
(2006)「遠隔交流授業における異文化理解と異文化コミュニケーション教育」(科研費報告書)

・坂本、吉田 (2006)「立命館大学・立命館アジア太平洋大学遠隔交流授業およびアジア学生交流プログラムにおける国際交流—掲示板・チャット記録の分析」『立命館産業社会論集』

・坂本、吉田、宇根谷、本田、片山、和田 (2006)「立命館大学と立命館アジア太平洋大学間の日英語クラス遠隔交流授業」『立命館高等教育研究』

・坂本、吉田、宇根谷、本田、片山
(2005)「インターネット，TV会議システム，対面交流を活用した遠隔交流授業—立命館大学と立命館アジア太平洋大学間の場合」『日本教育工学会第21回全国大会講演論文集』

Zapping 原稿募集



研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付していただきますようよろしくお願いいたします。